

## 地域づくり表彰

ささラブ応援隊  
(山口県萩市)

### 学校は地域の宝

### 学校存続に向けて

ささラブ応援隊

隊長

ひろた まさお

廣田 雅央

文責

ふなき よしひろ

佐々並小学校長

船木 美弘



#### 1. 萩市の概要

萩市は、山口県の北部に位置し、北は日本海に面し、東は益田市（島根県）、津和野町（島根県）との県境に接しています。気候は、沿岸部においては対馬海流の影響を受けて比較的温暖であり、中山間部においては盆地特有の気候で、変化に富んだ豊かな自然環境を有しています。

また、日本で唯一「江戸時代の地図がそのまま使えるまち」といわれるほど、毛利藩政期に形成された城下町のたたずまいが都市遺産として今なお現存しているまちです。また、吉田松陰をはじめ高杉晋作や伊藤博文など近代日本の夜明けを告げた人々を輩出した「明治維新胎動の地」です。さらに、平成27年7月に萩反射炉、恵美須ヶ鼻造船所跡、大板山たたら製鉄遺跡、松下村塾、萩城下町の5つの資産が、世界遺産に登録され、萩固有の有形・無形の資産を活用し、新たな観光形態である「学ぶ観光」・「教育観光」にも取り組んでいます。



萩・明倫学舎

#### 2. 活動開始の背景・経緯

萩市旭地域佐々並地区は、萩市の南部を占め山口市との市境に位置する農村集落です。江戸期には、山陰の萩城下町と山陽の三田尻（防府市）を結ぶ街道「萩往還」の中間点に位置することから、参勤交代などの際に藩主が休息する御茶屋を中心とした宿駅機能を有する集落として栄え

ました。現在も歴史的な街並みが色濃く残る佐々並市は、伝統的建造物群保存地区に指定されています。

かつては栄えた佐々並地区ですが、現在は人口減少と少子化が著しく進行しています。地区唯一の学校である佐々並小学校の児童数は、昭和30年代の約400人から令和2年には16人まで減少しました。また、同時点で地区内には未就学児がいないことから、在校生が全て卒業する令和8年3月には休校となる予定でした。

こうした状況の中、学校と保護者は懇談を重ね「小学校を存続させたい」という思いが一致したことから、令和2年12月に「ささラブ応援隊」を結成し、佐々並地区への子育て世代の定住を促進する活動を始めました。



伝統的建造物群保存地区

#### 3. ささラブ応援隊の結成

休校か学校存続か？どちらか一方しか選択できません。何もしなければ休校になります。

今後の動向を考えるために、令和2年10月に学校と保護者の懇談会を開いて現状と危機感を共有しました。休校の時が明確になったことで危機感を募らせた保護者は、「地域の学校はずっと続いて欲しい。子どもたちに母校を残してあげたい。」という思いが切実となりました。しかし、保護者や学校だけの努力では限界がありました。

そのため、令和2年12月に「今で

きることを、今やろう」と、保護者、地域、行政そして学校が連携する「四輪駆動」で子育て家族の定住促進活動を実践する「ささラブ応援隊」が結成されました。



#### 4. 実働 ～見学会の実施

残された時間がなく、早急でしたが、結成2ヶ月後の令和3年2月に新1年生の確保を目標に「第1回佐々並小学校と住まいの見学会」を開催しました。学校と少人数指導、先進のオンライン授業の魅力を伝える公開授業、児童による佐々並紹介、地域の人と触れ合う地区の散策、行政の支援で移住に必要な住まいを紹介する空き家の見学を実施しました。



空き家の見学会

保護者はポスターを各所に掲示依頼するなどPRに奔走し、地域情報紙やテレビ番組でも紹介された効果もありました。見学会当日は、地域住民が組織する「どうしてやろう会」による伝統的建造物群保存地区の案内も行われました。参加者のお土産として、地域の方が応援の言葉と共

に野菜やお米200kgの提供もありました。

危機感を持ちながら地域ぐるみで見学会に取り組んだところ、参加7家族のうち3家族から移住希望がありました。そのなかの1家族4人の移住がすぐに決まり、令和3年4月、今後ないと心配されていた佐々並小学校の入学式を実施することができました。学校や保護者だけでなく、地域全体の大きな喜びとなりました。

その後も2回目、3回目と学校と住まいの見学会を実施、農業体験活動などのイベントの開催や移住希望者との関係づくりに取り組み、約1年間の活動で計4家族14人（うち子ども7人）が佐々並地区へ移住が決まりました。おかげで入学式も令和7年まで毎年開催できる見込みとなり、地域の関心や支援も広がってきています。



移住第1号の子育て家族

## 5. 本当の課題

すべてうまく進んでいるように思いましたが、大きな課題に直面することになりました。

これまでささラブ応援隊で移住促進活動を行い、移住家族が4家族決まりましたが、実は、まだ移住の問い合わせが数件あります。なかにはSMOUT（移住支援サイト）を通して他県からの問い合わせもあります。けれども、子育てをしている移住家族が希望する内容の売買や賃貸の空き家がなく、残念ながら移住の話が止まっています。住まいがあれば、子育て家族の移住が可能になります。

## 6. 住まい確保のための次の一手

現状のささラブ応援隊だけの取組では、住まいの確保がうまく進まないことを痛感しました。そこでこれらの解決のために、地域全体に呼びかけ、各地区の代表の方や地域のことをよく知る方々に支援をお願いします

ることになりました。

そこで、ささラブ応援隊の役員が協議を行い、「佐々並地区移住促進連絡会」を設立し、佐々並地区全体で空き家の活用を考え、空き家物件を確保していくことになりました。

そして令和4年5月22日に第1回の連絡会を開催し、佐々並地区の空き家物件の情報交換と確保についての協議を行い、地域が連携・協働した活動がスタートしました。早速、新規の空き家の情報を得ることができました。



情報交換用の資料

## 7. ささラブ応援隊の支援活動

### (1) 魅力ある学校づくり

自然豊かな佐々並で、楽しく元気に農業や自然体験学習など佐々並の魅力を感じて「ささラブ学園」を年間12回程度、佐々並小学校が開催しています。小学生ならだれでも入園できます。また、土・日曜日、夏休み中は他の地区の児童の参加もでき、移住のきっかけになっています。

ささラブ応援隊として、体験活動の準備や当日の運営の支援を行っています。また、地域の方に先生役として活躍いただいています。



ささラブ学園 稲刈り教室

### (2) 魅力ある地域づくり

移住希望者に「住んでみたい」と思ってもらうためには、住民と移住者の関係づくりが重要だと考えています。そのため地区の魅力である伝

統的建造物を改修し、住民と地域外の人が交流できる施設を、市が整備しています。この施設で、食事や調理を通じて子どもとワイワイと楽しめるイベントを開催し、移住希望者との関係づくりに取り組みます。



新しい拠点の予定場所

### (3) マッチング お見合い大作戦！

地域の強い要望を受け「地域の独身者の出会いの場づくり」を進めています。ささラブ応援隊を中心に企画・運営を進め、第1回のイベントを令和4年7月24日に実施しました。参加者は、男性15名、女性10名で好評だったことが伺えます。今後も定期的に出会いの場づくりに取り組み、地域での子育てや家族の誕生を温かく見守っていきたいと考えています。

## 8. 課題と展望

まだまだ手探り状態の「ささラブ応援隊」で、学校存続のためには児童数確保が必須です。佐々並小学校は、令和8年度からすべて移住家族の子どもになる予定ですが、これが学校存続のための「時代に応じた学校の姿」であることを、地域住民が理解の上で移住促進活動を行っています。何もしなかったら児童数が減って休校になってしまう現実がすぐ目の前にあります。「学校の灯を消さない」「学校は地域の宝」「やってみないとわからない」を念頭に置いて、地域住民全員が当事者として活動を推進していきたいと考えています。

佐々並を愛する思いや願いが一つになった時、学校が存続し、地域が活性化することを信じています。

今度も地域発展のための重要な四輪駆動として「ささラブ応援隊」の活動が続いていきます。